古今奇帳

三

古今和歌六帖第三

水

阿波文庫

後拾遺 いとゝ山 岩井下みち 出しゝ人を 人あまた 見て

拾集云 沼水 清みなくて 廻り来 信濃 つゝ

玄集 玄集 岩井下 みち 出しゝ人を 人あまた 見て

一カ十二 おくゝ山 乃木 信濃 つゝ 初 乃 雪 少し 降れ 信濃

貫之

拾遺 松 井 こゝ 世 流 人 山 松

そてこれ

古雅 君 代 あ 恨 山 乃 岩 流 乃 木 信濃 つゝ 有 ひ 山 ん

一カ十四 流 れ 乃 岩 こ 流 な 川 る 乃 ふ ん 恨 ハ 紅 ふ 山

乃 島

一カ十八 乃 ま 井 か 乃 山 色 井 ま 乃 恨 井 ま 乃 恨 井 ま 乃 恨 井 ま

一カ十八 秋 乃 雲 乃 青 羽 井 乃 雲 井 ま 乃 雲 井 ま

一カ十二 嫁 乃 雲 乃 井 ま 乃 雲 井 ま 乃 雲 井 ま

一カ十二 秋 乃 雲 乃 井 ま 乃 雲 井 ま 乃 雲 井 ま

一カ十二 秋 乃 雲 乃 井 ま 乃 雲 井 ま 乃 雲 井 ま

乃 雲 乃 雲 乃 井 ま 乃 雲 井 ま 乃 雲 井 ま

そてこれ

乃 雲 乃 雲 乃 井 ま 乃 雲 井 ま 乃 雲 井 ま

乃 雲 乃 雲 乃 井 ま 乃 雲 井 ま 乃 雲 井 ま

乃 雲 乃 雲 乃 井 ま 乃 雲 井 ま 乃 雲 井 ま

乃 雲 乃 雲 乃 井 ま 乃 雲 井 ま 乃 雲 井 ま

拾遺 羽 乃 雲 乃 井 ま 乃 雲 井 ま 乃 雲 井 ま

後撰 乃 雲 乃 井 ま 乃 雲 井 ま 乃 雲 井 ま

古意二
池ふかしむ名を鷺島とあらためしとあるそれ
考 ものなれ川（よしなくうとけのみてさえ惰らん
君ら名を城名をもの一流おるーえをすまし
白妙の浪ふりて鷺のえる見ばとんや侍うん
よもち

新古意一 貴京元真
雪ふかめ池を見てなくもの一羽
貫之

鴨
集 ちとせいつ池ふかけれ鷺ものの庭ふるとて
はつゆき

土左日記

いかのくるかけとうをあやまりてとなりてみもんと

土左　とまりこそ人乃ほとりよりこぎいでんとする也時乃ほとりにて

一カ土　ひまこそなけれつるのやうにわたんとすれども

日九　ほいなき海乃ほとりにて時乃ほとりにてくもりなくてみたれ

橋

於　みやこ鳥とやとはんとおもへばかなしさのまさるなりけり

未考　ゆく乃ほとりにて時乃ほとりにて人のなかるるをみる

一百二十　みやこ乃ほとりにてなきて河をこえんとするに君をかこつまやい

未考　橋をしるしとする河をこえんとしてとりけるとて

日　君をかぎりとおもへばたてて池をすむ橋といふなるべしとかうこと

中暫集

古井川廣もえ乃
帝ふのうりぬうけ
いくよへぬるん

日　あずまへくだりしとき乃ほとりにて鳥のこえをきゝてよめる

一百四　みやこ乃ほとりにて池乃ほとりにて君をかこつ心をよめる

後長中　春乃池のほとりにてみやこ乃ほとりにて

未考　ほとゝぎす乃ほとりにて

う

一百十九　うしとのみ世をかこちけるかいなくてかくせしかは

日　白河乃ほとりにて

日　うつりにけりいたづらに世をすぐしてながめせしまに

やうもち

かめ

未考　歌集　吉河乃廣はたにて

日　大内乃ほとりにて

我妻に心をつくるきりぎりすの鳴くなへ
やみぬべらなり

万葉集

[illegible]

いと

[illegible]

[illegible]

[illegible]

川

[illegible]

[illegible]

[illegible]

射水　朝　已藝云

越中

百十九　あさぼらけ　ありあけのつきぞのこれる　ゆきのあさ

百七　みよしのの　やまのあなたの　とおもへば

後拾遺　ゆきをのみ　ふりしくときは　ひとのいへの

後拾遺　陽成院御製　ふるさとの　はるのにかすみ　たちかくす

後拾遺　はるのゆき　ふりしくときは　ひとのいへの

百九　君ひとり　かよふ　ものとや　思ひけん

百九　人ぞ　通ひ　なれぬる　神のかよひ

百九　ゆく　ものとて　ながれてとまる　みなくちの

百九　ゆく　ものとて　ながれてとまる　みなくちの

百九　君ひとり　かよふ　ものとや　思ひけん

百九　君ひとり　かよふ　ものとや　思ひけん

陸奥ふかくなる玉河の水底さへあさきなる

ちとなるくるあちかをみる時いやまさりにくるおもかはる

はてしなくたゆまぬ門のたかいはのもとにせる

ゆくすえ　ながれてとまる　みなくちの

百九　みなくちの　ながれてとまる　ゆくすえ

百九　百代まで　ながれてとまる　みなくちの

百九　百代まで　ながれてとまる　みなくちの

百九　百代まで　ながれてとまる　みなくちの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中宮の御方にかはらぬ御ぬの袴をあつらへ
人々にとあるを紙を何にかはらぬ
雖渡なるを其侍をつくる事尽に何よりも

以上二首

いな

向屋敷なる所にて
所なる野に向て家の煙を見て

以上二首

世乃中

まゝ滝乃流れつゝ絶ぬ
とゝ堅田にて
後撰一 伊勢 ちゝ分らぬ水に沖ゆく舟の

うゝゝゝひゝ氷と
樋とゝゝる日不
害

百二十
ゝ河よりあかりてゝ
乃名所乃ゝ

井ゝ紀

大内川井ゝ紀ゝ越て行乃絶ゝ
堀内川せゝ紀ゝ
ゝ乃ゝ六波乃ゝ
大井川ゝ紀乃ゝ
ゝ紀ゝ
ゝ紀ゝ
ゝ紀

わきもこが神のまつりに榊葉の
さかえをいのりて我こそは榊
花島川せてゆくとも榊あまたなりしを
はらゆき

風河をこえみつ〳〵咲ける神のこころ
爆竹の花乃なりくるこかくる藤乃
大和川心しかをかくもとゆらかれて更さくる
人とまてあなくさんくさかりてまさてあるの
河乃月乃かさる榊をあへあれなかりつゆ
いせ

ひとせをこうれあるの時乃こうれのこと人
花

世乃をこえて河をこえて清きを割ひとつ榊をこそ花
貫之

かつらの新しるる春乃月
なりつゆ

大和川かつらの舞人をとよ乃なのこと今
はらゆき

神乃集
かつらの人をこそ乃なかつらの新
かつらの人をこそ乃なかつらの新
かつらの人をこそ乃なかつらの新
猶川とるかこれはる舞人をこれかつらの
人丸

武士乃中宮藤門乃あり乃まよいてる度乃ちくへて北
こいつ
河よりの河面のこゝろ河乃まよまもらんとはへて藤里まもる
貫之
藤波乃紅葉乃上乃百年乃姫のとなれあり乃へ今
はまこと
紅葉乃北なる道にてこまるあり波乃白波まさりて
三吉野乃ゝ北河乃あり乃ゝ流のみなとに藤
貫之
宇治川乃あるかなにて君まさに紙あり波乃あ
うち河北波乃ちく吉野をとなく細代なるてつの人のつまふ

やれ
やれ
おなじ北やるゝち波と北をとゝあふ
江
入江乃ゝ中乃ゝ毎漕加
武藤乃入江乃水乃人なる人
ゝ井乃ゝ乃武藤乃ゝ毎乃君
貫之
藤乃中北なる河乃ゝ波乃
ゝ後乃ゝ中乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

みるからにはるさめふるこしのくにの人をこそ
いせの海にとりあつめたるみるめ人の心を
あくがれてみるめのなぎのはるかぜにいとどやうちん
はるばるとなめるかぜのかをるかぜ
いを
我せこがみるめ波のかをるかぜ
夢うら
雨のふるとは花にぬれぬ
ちるさくらかぜはなをもまつらんかつらぬきの
恋ぬるあまのかるもしほ
いのちをてをあまのかるもしほ

あさなあさなとあるめいせの乃池をみれば人よりはあなたのこころ
ひとりもあるかぜはあるけれどあるかぜはあるけれども
かりもさくらのもとをてふてはあるけれども
ちりぬるかぜはあるけれども
あるなるめ池乃あるなるめ池乃
みどりの池のたかせ
みるめ波
あるうまてふ乃うまて
なるめてもいてるかぜ
おるすくさ君とかるの池
あるかぜはるくさ池
儲漏方示吾將越八方
あるの人

いかにせむ
ぬさ
おくやまの石垣沼乃水こまかにみなぎりて
みるよさてくもみぬ沼のとのゐをまるくそる
紅乃袖のなかれ出
いけとてら紅ひ
かくれもくあしたなめ
かくれぬ乃下紅なれ
うくまぬのとのゐ
うまま
菅根

以上八首

貫之

百草共花乃陰まてこそ春をかくへき白河乃きし
色んせす

後撰二

今はしらん所しらぬ海へ流れつるとをきをしらぬ人
いせ

乃上をしらぬ乃をもかなしみ流るるをもゆる流れ
とんかいわう

古歌二

清瀧乃せゝ共白糸をくりてゝ分れをもてまもりを
清神

玉歌二　僧正遍昭

見はてぬ夢とのこゝ地して拍なたの迷る流れ行りの命とも
在原乃滝乃濁乃清るを人とゝ流乃名ハ

いつゝ
井繰ておつる流なれ乃とゝ
をもてまもりを
乃はしめ
乃はしめ
人
人
人

詞書ナシ 春の日よりあるかなきかのうらみをしらする
才女抜思ひよらぬ再出

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

海

いせの海の波のうらなく独こゆるかな

[illegible]

[illegible]

[illegible]

海あるふ咲ちる浦の花さき遠い海よつまとふれぬへくそ
わ行潟乃奥はとちをせよ潟遠てもへのうるせまてをを
なこは海のあさもはるをつ尋ねいそらうふうをうをあ

あま

あひのうする延ふいとあみ紐と紐の緒みえ花せ遠ふつを
あひまをるあまをやえんん嫁の海乃浦きあ嬢いとんを
わ行潟ハ潟も心やあうわんあまて海士のうをみふう
いをう海の海は遠とうまうう乃あうやう海らあて花後を立の三ん
海ことあいさあるあまあをてまあをあをんとだふ
あまををあのうあ嬢人の紐わくくんて人らく立海くうん
朔をあまあをふちを海あうを及をあ立て紐いをうう紐

心してひをたあまを紐あをあひあんあいあをあをける

いせ

なをはいまろ

わかうをや乃うちまて少西あのまをとあことはあのあ
雖波かをを神あるむをを紐あはを海をを紐ハ風あをうちる
なをくをを立あをうをのをハをはを海の海をとうまをとむを
ををくをを

たくちををはを紐命のわくけ遠い移てをを人ををまわをを
いせ乃海はあまあをを優をあへいをあをんとを紐をうをを
いをは海のあをるくをちををををてををやまをを人のあを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

後拾遺二
乃千鳥なく佐保川のまちとをかくのみ恋ひやわ
紙せこと思へやめて佐保川のまち絶ゆ
みちはたいはまとあまと佐保川の波に
佐保川の清みはまんあの言い渡しつ
小野

百四
大和ねのこの恋ひ高い紙を恋ひ
いて新しん人ひとりあて大和の
人麻呂

百五
みる紙恋なまはは尾ひ毎ひつ心を
むかしおらふひまを清しとはみ
あまとりの紙とみるまてとの海を清とて
義張流　見左右持

後新二
なみの分の海とに紙海海る紙
たらちねの

万葉巻九高市歌一首恐是高市皇子

百九
あーまて清紙毎ハる清紙あのとみ
照月紙雲紙かくて清紙毎をんこもち
ひとり清

百九
わ月清紙いつまの紙紙はるまとあるん
百十
あら海の清紙とはてとあとあ
清のまち

百十一
月というえ真清月清るかく海乃紙毎こ紙とるみ
百十二
うとまてうん清てまーとあるあ月紙の猫とるまるく故れ月ま

近江の海波をそろへて風あらくとも
おもふ
波立つ沢ふる雨をあてひろひ波あまたそ
なれ
百二
ふるさとの山紅葉
人まろ
古抜
ほのぐとあけぬ海の朝霧
沙弥満誓
夫恋
百十
夫恋
百二
世間
拾良傷

みるとこゝろもとめてとる海の夕陸をもまつんとよ紙にて漕

ゆふつゝ遠い振乃者ゆ四あまとて奥ほ為てくる海岸と

佐つと

いせ乃海の海士乃ほかりとよ〳〵て来てとの者こひらん

伊勢の海のあま釣をする延出乃まぬかめとあて陸よ紙たのら

風といろん真白原るかゝ一疑のほかりて海ゆ

曝ちるくあまの釣縄うしろくとるゝとうはるあて

志つのあまに釣をるひとゆ海ひかくとうゆ

いとり

大あの色こ海よいあれらゝめてと新こんやゝん

近江の海奥あゝあのいかるとおろゝ乃君ゝ思ひつゝ

ひとの世ほ恨ちるまりて作めとあもあのいふにとすもうたん

あゝ

いせ

ゆとゝとゝ打信ほの海よかとあゝかけまを志ちる

信濃の浦のあひま釣乃ほうゝゆん志つあて八

あまゝ海の色こ志つあるゝ井かハ浦ゝ心のかとるゝ久

ほつとれかゝゝ世めとる紅まて来めゝう

なみめて

棹ゝうひま浦のゝるなのゝを井紅くまてるのくあゝ紅

あゝん

見ほてわゝ芝藤よ世ゝ志なのゝうそほとるゝつをそよたやゝとる

[illegible]

藻

[illegible]

[illegible]

[illegible]

白浜とやのあまのいへにあれかはのみつをくみてみる
大かはらをみなとにつくるあまをみて漕出る人をたんをくるあすくるを
奥せい

たかしほをたうしほをたてをかはるつるのこゑ
あるもの

うつをのみをれはるまもあらしてみるの海をよるたかた
下津海の廉のあまをよるをれはをなつてをはかる
はかりをもあまやかはすくいをの海乃浦をる海をみる
いせ乃海の鏡かをるあまをみてみるあまをくるあハ
白浜をさはくらをあまをの海乃入るあハかんとをせみ
白浜のをのくをてくるをいあまのかをてみをつをまをる

うれをあまをの海をしらをかめてのをてを海をよをめ
をををを
奥津浜をしらををを

貫之

行末の海よりかよふ風なれば沖の白波たちぬべらなり

小辨

海人の住む海とは聞けど清くして袖さへぬれぬ名にしあるらん

よみ人しらず

いせ集

あまの住む海とは聞けど袖ぬれぬ名にしあるらん

伊勢

伊勢の海のあまの釣舟
とをとめらが
玉藻刈るらし
あまの釣舟

百六 わたつみの
いくの海に
いさりする
人を羨

百七 ゆふなぎに
あさりしに出
あまの釣舟
とをつね

百十 住吉の濱
とをつね

紀乃国のあらの浜の長貝
なにはの
白浜の長貝
我乃やの
何のうら
しま
百十二 笠の浦乃
荒
蘭
笠島
山ち
なにはのあさつま
まつ
なにはのあさつま
つる
なにはのあさつま
古雜上
なにはのあさつま

戒仙法師

人麿

あら人

紀乃国の須磨浦にて海人の塩焼くを見て

須磨の島

[illegible]

[illegible]

[illegible]

白浪の立つる海士の塩焼きの煙ぞ[illegible]

[illegible]

八十潟に海人の塩焼き[illegible]

[illegible]

人まろ

みくまの浦に海士の塩焼くを見て[illegible]

[illegible]

[illegible]

古雜上
むしろ山のふもとあたりにてあまたきれる藤の花わを奥より出
たるゆき
土左日記
風のうつる浦の藤波を雪はなにてはなのそてはく
れなゐ
日記
後京
雪をいとふ心をしるしるべとなるこの藤の色濃や今はまさ
り
浪
百十
大海よりとりつたる波は今もあらん岩にくやしけ
れはこそ
百十
打よせる海原遠い秋色のつきあのうとてまつ遠
人まち
百七
伊吉の浦は家とうなるとうとうとる白浪みつ
あつたん

同十
あつ遠みるとて清かい海よりうる波のさとひろもとみくろ
土左日記
をていらつる遠いまるあるいは風と波とにはとうやさとん
ゆうつをてまるるみてやるも乃浦よりあさ波よりの浦
百七
伊吉乃浦は松はとあきさ
赤秀
いつみてやしてあ波を岩をいとみとうとうとて浦
もとかす
百意
ちかつの岩をそとてみ金ものても岩を心をたまつる浦
人古
みんやのあさやを
古秋下
はるまて来ん夏のあさ
夏百
海の波は花を嫁なれ
いせ
伊のえは角よりつかへ打よりて波のかとをとうとうとう

百十三
住吉の岸よりこぎ出る舟の
けぶりよりほかなりし富
人八代集
みをはつくしてこぎ出てあのまもる船長みつ
ゆきの人こ
後京女
信濃なる千曲の川の
拾遺二
たきの瀬
我
古意 苔方
春ゆくる波の岸よりみちあふれ
浦苔方
赤考
河瀬もうつほかるるみをはつくしもかるる船長
かた
百七
なみのうへにはひあふぎをいかにせんと
井比丘人
百九
なみのうへにはひあふぎをいかにせんと
のとどめこ

貫之

土左日記
百十
いつかはかりをかりけりてみやこにみやこ
百十
なりてくるかりかるのおきはなるみやこにかるむ
家物
みやこ
百十七
みやこ
百十
はるかにこのくまはまつのかりかりかるる
はるゆき
土左日記
いつ月はてをとみはいとはかりかりかる
とせい 或本伊勢
古秋下
紅葉はなかりしてこのうつ深ふかくしかるみ紅葉して
石川大夫
百三
おもはせ
百三
おもはせ
百三
おもはせ

百七

おもかゝるるに風分て我身とゝんとまわるとゝ